

# 新任教授挨拶



長崎大学医歯薬学総合研究科

発生分化機能再建学講座

小児顎口腔発達管理学分野教授 藤 原 卓

日本小児歯科学会九州地方会会員のみなさま、20周年おめでとうございます。2002年4月より前教授の後藤讓治先生の後任として長崎大学歯学部の小児歯科を担当させていただくことになりました。同時に長崎大学は大学院大学となり医学、歯学、薬学の研究科が統合され再編されたため長い名称に変わりました。

私は1983年に大阪大学歯学部を卒業後、国立予防衛生研究所、大阪大学歯学部小児歯科学講座および口腔細菌学講座において臨床、基礎の経験を積ませていただきました。長崎に来るまでは近畿地方会に属していたわけですが、昨年近畿地方会でも20周年を迎え、また九州で続けて20周年を迎えたことは、私にとって非常な幸運であります。

今年初めて九州地方会大会に参加して感じたことは、会員の先生方が非常に熱いということです。大学で雑務に追われていると、ついつい忘れてしまいがちな子供に対する熱い思いが、会員の先生方に満ちあふれているように感じました。九州にはう蝕罹患率ワースト10の県をいくつか抱えるなど、解決すべき問題はあるものの、それに対して立ち向かっていこうとしている会員の先生方の熱意がひしひしと伝わって参りました。

私が生まれたのが1959年ですので、私たちの世代がいわゆる“むし歯の洪水時代”に子供であった世代です。大学を卒業するころは、そのむし歯の洪水の時代が終わりをむかえつつあったと思います。まだ臨床実習でも学生一人に4人ほどの患者さんが配当され、小児歯科には毎日4—5人の新患があったように記憶しております。小児歯科に入局してからは患者数は減り続け、数年前では入局時の半分にまでなりました。恩師の祖父江鎮雄先生などの先輩方から、小生が入局する前には押し寄せてくる患者さんをいかに断るか、毎日毎日いくつもの乳歯冠を入れ続けたとかといった話をよく聞かされたもので、その時代を経験した諸先輩方に比べれば、私の臨床経験などはお恥ずかしい限りです。しかし現在大学病院では臨床実習にあたって学生3—4人に一人の患者さんの配当にも苦労しておりますし、新患も一週間に数人で、新患のない日も珍しくありません。

学生時代にはやった“戦争を知らない子供達”というフォークソングがありましたが、まさに“むし歯の洪水を知らない小児歯科医”がたくさん生まれております。これは別の意味では先輩の小児歯科の先生方の努力の賜ともいえますし、むし歯の治療に追われなくなつたからこそ真の小児歯科を実践できるのかもしれません。次世代を担う責任のある我々として、これから新しい時代の小児歯科を作っていく責任を感じております。

なにぶんにも若輩で、はなはだ至らぬ身ではございますが、微力ながら九州地方会の発展のため精励いたす所存でございます。つきましては、なにとぞ皆様方のご支援とご厚情を賜りますよう、ひとえにお願い申し上げます。